
dead or dead

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dead or dead

【Nコード】

N3293M

【作者名】

蜘蛛の血

【あらすじ】

知らない部屋に閉じ込められた五人の男女。
彼らはこの先、何をすればいいのか。

（前書き）

この小説は、ドアDと言う小説の二次創作です。
どうぞ

「絶対犠牲が出ます。」

考え、工夫し、祈ってください。」

第一の部屋

「絶対に犠牲が出ます。」

考え、工夫し、祈ってください。」

「なんだなんだ？」

何を祈れって言うんだ？」

「全くうるさいね。」

「ここどこ？」

「僕八、確力日本ヲ回ッテイタハズデスガ。」

「何なんですか？」

このアナウンス。」

五人の男女が目覚める。

「絶対に一人犠牲になります。」

考え、工夫し、祈ってください。」

「なんだなんだ？」

「ここどこだ？」

「そんなことよりも、貴方たち誰ですか？」

「ソウ言ウ貴方モ誰デスカ？」

「・・・自己紹介から始めましょう。」

とりあえず自己紹介。

「俺は、佐藤 豪」

黄色く染めた短髪の男性

「私は、岐土 姜子」

黒い長髪の優等生のような女性。

「自分は、神崎盾」

色黒のスポーツマン。

「僕八、ジャイケル・ジューンデス。」

日本通のような白人男性。

「あたしは、釘野^{くぎの}美音^{みね}」

少し茶がかったショートヘアーの女性。

自己紹介を軽くして、此処がどこかを散策する。

「まったく何もないじゃねえか！」

「マアマア落着キマシヨウヨ佐藤サン。」

「……。」

「何かありました？」

「何も有らんがな。」

何もないとあきらめかけていた頃。

ガコン！

「何だ？」

壁から文章の書かれた板が回ってきた。

「えーっと読みますね。」

「才願イシマス。」

「この部屋の仕掛けを十分以内に作動させなさい。

犠牲となるものは、一瞬で消え去るでしょう。」

なお、十分以内に作動させなければ、毒が流され、全員が犠牲となるでしょう。」

だそうです。」

「どういうことでしょう？」

「どうでもいいだろ。」

どうせ張ったりだ。」

「そうだとは思いますが、一応仕掛けを探しましょう。」

「見つけたらいいじゃない方がいいですね。」

「OK！ 皆デ探シマシヨウ。」

全員で仕掛けとやらを探す。

搜索中……

「？ コレジャナイデスカ？」

ジャイケルが床にある突起を見つけた。

「お、で貸したぞ!」

全員で、そこによる。

「仕掛けて、どんなんだ?」

「一瞬で消え去るって書いてありましたから、落とし穴かなんかでしょう?」

「そのくらいなら良いですけど。」

「どういうこと、岐土さん?」

「私、こういう噂を聞いたことがあるんです。

見ず知らずの五人が選ばれ、一人ずつ犠牲を出しながら外を目指す定期的に行われる禁断のゲームがあると。」

「なんだその中二病チックな噂は?」

「話は最後まで聞いてください。」

そのゲームに選ばれるものは、とある電子広告を消している。」

「電子広告ならあたしはいつも消してます。

いろんなサイトから迷惑メールとかくるし、放置してると勝手に契約させられていそうぞ。」

「俺は、この間珍しく来た広告を消しただけだぞ?」

「俺も、そんなとこだ。」

「僕八、特二覚エガ有リマセン。」

日本二来ル前八、広告八勝手二消エルヨウニシテオキマシタカラ。」

「私は、心当たりがあります。」

確か、こんな広告です。

「君はこのゲームで生き残れるか?」って言うやつで、最初はネットのサバイバルゲームか何かだと思っていました。」

「それならあたしのところにも来ました。」

「最後に消したのはそれでぜ?」

「俺もそれだ。」

「僕八、勝手二消エルノデワカリマセン。」

五人の共通点はあった。

その広告を消すことが、このゲームの参加条件なのだ。そんなことをしてるうちに、十分経過。

プ
シ
ユ
ー
！

「毒ガスかよ！」

「仕方ねえ！」

俺が動かす！ 下がってる！」

盾は、ほかの人が離れてすぐに、仕掛けを踏んだ。
そして。

「なっ！？」

ズズウン！

「えっ？」

[illegible]

上から天井がスイッチの半径1 mに落ちてきた。

その落ちる直前には、グチャだかグシャだか、言葉に表せない音がした。

「毒ガスは本物だわ、本当に犠牲は出るわ！
何なんだ！」

そして、仕掛けを動かした後、毒ガスは止まり、壁が開き戸のよう
にあいた。

「行くしかないのか？」

「行かないでどうするんですか？」

飢え死にしますよ。」

「ひっひっ・ひっひっ・ひっひっ」

「行キマシヨウ。」

ホラ、釘野サンモ、泣カナイデ。

「はい・・・うう。」

その扉をくぐると、暫くまっすぐな廊下が続いていた。

「いつまで続くんですか？」

「とりあえず続く限り行くしかないだろ？」

「ソレが一番デス。」

「・・・・・・」

しばらく進むと、扉がある。

「次はどんな仕掛け何だ？」

「行ッテミナイト分カリマセンヨ。」

「生き残るためにも行きましよう。」

「・・・・・・」

さつきから、美音は無言である。

ギイイイ！

第二の部屋

あけると、その部屋には天井につながれた四つのヘルメットがあった。

「何なんだ今度は？」

「アリマシタ。」

エーッ。

「全員がそこにあるヘルメットをかぶってください。」

誰かがおぼれば扉が開きます。

十分以内にかぶらなければ毒が流れ、全員が犠牲になるでしょう。」

ダソウデス。」

ジャイケルはそれを読み終え、四つのヘルメットを見る。

「ドレカカラ水ガ出ルノデショウカ？」

「だったら、さっさと選ぼうぜ。」

どれになるうと運次第だ。」

何故か豪は、諦めかけている。

「そうですね。」

誰が死んでも恨みつこなしですよ。」

「分かりました。」

「勿論デス！」

四人は、それぞれ適当にヘルメットを選び、その前に立った。

「それじゃあ、せーので行くぜ。」

OK

「はい。」

「ふんふん」

四人は覚悟を決めて、ヘルメットの下で屈む。

「せーの！」

全員ヘルメットに頭を入れると。

シュー!

（首のところが閉まった！）

つまり俺が犠牲か？

だが、周りを見ると、全員そのようだ。

「ドウ言ウ事デシヨウカ？」

皆不思議がつていと。

チヨ口口

ヘルメットに水が流れてきた。

「持久戦か!？」

「オウ！」

「何でこんな。」

「もう、嫌。」

できる限り息を深く吸って、息を止める。

ゴボア！

「もう限界！」

美音がおぼれた。

其れによつてほかの三人の水が抜けて助かった。

「ハア・ハアハア。」

「釘野サン。」

「仕方ないさ。」

あいつが犠牲になったおかげで助かったんだ。

「とにかく助かったんだから先に進みましょう。」

「ああ。」

「ソウシマシヨウ。」

待たないがい廊下が続く。

そして、その先には。

第三の部屋

「今度はなんでしょう?」

そこには、中華テーブルに、ミートソースパスタ、ホットケーキ、ステーキ、サラダ、ティラミス、炒飯、グラタン、コーンポタージュ、刺身、タコス、プレーンオムレツ、鰯の煮付けが置かれていた。椅子の数は五。

「えっと、今度は。」

「好きな椅子にすわり、一人一品ずつ一口だけ食べなさい。はずれを引けば犠牲となります。」

なお、同じものを選んでも同じである。

十分以内に始めなければ毒が流れ全員が犠牲になるでしょう。」
だによ。」

「ロシアンルーレットデスネ。」

「やるしかないんですね。」

一人ずつ、適当な椅子にすわり、始める。

「俺から行く。」

「・・・このオムレツにするか。」

プレーンオムレツを選び、一口。

「・・・セーフだな。」

「ソレデハ、次ハ僕デス。」

ジャイケルは、ミートソースパスタを選び、豪快に食べる。

「おい、毒だったらどうするんだよ。」

「毒ダトシタラ、全体ニ塗ツテアルハズデス。」

ダッタラ、思イツキリ食ベマシヨウ。」

ジャイケルがごもつともなことを言う。

ヴヴヴヴヴヴヴヴ

「羽音？」

「どうしたんだい？」

早くしなよ。」

「あ、はい。」

姜子は、ステーキを選び、上品に一口。

「・・・セーフですね。」

二週目

ヴヴヴヴヴヴヴ

（何なんでしょう、この音？）

「えっと、じゃあこれにしようかな？」

豪は、刺身を選び、食べる。

「・・・セーフだ。」

「僕デスネ。」

ジャイケルは、ホットケーキを選択し、一枚一口。

「・・・セーフだ」

ガコン！

「！」

姜子と、豪の椅子が下がった。

「何だ？」

「アウト？」

「Oh my god！」

引いた椅子の上から、ガラスの壁が下りてきて、豪と姜子を囲む。

「何であんなに気楽なんだ？」

「さあ？」

「僕ハ、軍人ダツタンデスヨ。」

自分が死ぬというのに、昔話を始めるジャイケル。
（なるほど。）

軍人の精神ならこのくらいは大丈夫ってことか。）

「サア、僕ノ死ニ方ハ何デスカ？」

その後、シャンデリアが回り、ところどころ隙間がある。

ヴヴヴヴヴヴヴヴ

「蜂！」

「コレハ流石ニ怖イデス。」

ジャイケルは、その場から動かず、蜂に刺されて命を落とした。
プシュー！

「毒！？」

毒かと思いきや、蜂がどんどん落ちていく。

「どうやら殺虫剤みたいです。」

全ての蜂が死ぬと、ガラスの壁が上がる。

そして、次の部屋への扉が開く。

そして、また長い廊下が続く。

第四の部屋

部屋には、四つの箱がある。

「ありました。」

えっと今度は。

「好きな箱を開けなさい。」

犠牲者が出れば外への扉は開かれます。

十分以内に、犠牲者が出なければ毒が流れ、全員が犠牲になるでしょう。」

です。」

その言葉に、二人とも一瞬息がとまった。

「ま、少し準備する時間は作るから、とりあえず選ばうぜ。」

「はい……」

今日この開けた箱には、丸鋸。

豪の明けた箱には鎖。

「……これって。」

「殺しあえってことだな。」

二人は、また一瞬息をとめた。

そして、二分ほど二人は心の準備をして。

「やるしかないですね。」

「ああ。」

気は向かないが生き残るためだ。」

二人は、ぎこちない構えをとる。

「！」

ジャラ！

「悪いな。」

俺もこんなところで死にたか無えんだ。」

ザク！

「あがつ！」

姜子は、第三の部屋でくすねておいたフォークで豪の首を刺した。

「！！！！！！！！」

言葉にならない声を出しながら、姜子は丸鋸で豪の首を切り落としました。

「ハアハア・・ハア。」

豪を殺した姜子は、外に出れるという期待だけで上に上がったが。

「え・・ああ。」

そこには、また同じような部屋があった。

だが、今までと違うのはほかに階段があり、そこから出てきたであろう人が十数人。

その人たちの人が一言。

「何だ？ あんたのそこは一人か。」

「一人？」

「ハッ！」

此処は第二の部屋。

おぼれた美音が目覚めた。

「生きてる？」

「・・・そうか。」

おぼれると、おぼれ死ぬは違うか。」

その後、何かを考え、はっとひらめく。

「さっきの部屋では、脚を伸ばすか、思いつき走り抜ければ何とかなったのかな？」

そんなことを考えて、開いている扉を進む。

「全部あいてる。」

そして、そのまま上に行ける階段を上がる。

「あ、姜子さん。」

「美音さん？」

生きてたの？」

「どうやら生き残れたみたいです。」

他から声をかけられる。

「生き残りはもういないのか？」

「はい。」

私が来るときはもう死体しかありませんでした。」

美音は、ある程度の説明をする。

「・・・来ましたよ。」

「やつとか。」

やつとということとは、何かを待っていた様子。

「来たって何がですか？」

「第二ステージさ。」

「第二ステージ？」

「ああ、全部の部屋の生き残りが集まると始まるって書いてあったぞ？」

「どこですか？」

「あそこだ。」

美音と、姜子は看板の字を読む。

「全員が集まったら、次の試練が始まります。」

仕掛けが現れたら、五分以内に動かしなさい。

なお、第二の試練は一つの試練の時間は五分です。

五分以内に仕掛けを動かさなければ、全員が犠牲になるでしょう。其れを呼んだとき、美音は膝をついた。

「必ず犠牲が出ます。」

「考え、工夫し、祈ってください。」

（後書き）

どうでしたか？

感想とかもらえたら嬉しいです。
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293m/>

dead or dead

2010年10月9日15時56分発行